



# JKS

一般社団法人  
日本膝関節学会

## No.5

2026年4月30日発行

# ニュースレター

## 理事長挨拶

神戸大学大学院医学研究科 整形外科 黒田 良祐



日本膝関節学会 (The Japanese Knee Society : JKS) は、設立からまもなく3年を迎えようとしております。ここまで順調な歩みを続けてこられたのは、ひとえに会員の皆様の温かいご支援とご尽力の賜物であり、心より御礼申し上げます。

膝関節外科に関連する研究会・学会は長い歴史を有し、多くの先達のご努力によって発展してまいりました。その歴史は関節鏡の発展の歴史と軌を一にしています。1918年に東京大学整形外科教授の高木憲次先生が膀胱鏡を改良し膝関節の観察を試みられたことに端を発し、その後、渡辺正毅先生らにより1959年に21号関節鏡が開発され、世界で初めて実用化されました。日本発のこの技術はやがて欧米へと広がり、1980年代には器具・手技の飛躍的進歩がみられ、1990年代以降は膝関節のみならず多くの関節において関節鏡手術が可能となりました。また、関節鏡技術の進歩と並行して、関節リウマチや変形性関節症などの変性疾患による膝関節障害への対応も大きな課題となり、1960年代以降は骨切り術や人工膝関節置換術の研究が進むとともに、新たな技術を取り入れた診断・保存療法の発展もみられてきました。近年はIoTやAIの急速な進展により、膝関節外科を取り巻く医療技術は革新的な変化の時代を迎えています。

1974年に発足した膝関節学会から半世紀を経て、2023年に新たに発足した日本膝関節学会は、膝関節外科学に関わるあらゆる医療の進歩に貢献し、人類の健康と福祉の向上に寄与することを目的として活動しております。第1回学術集会は岡崎賢教授を会長とし

て横浜で開催され、第2回は眞島任史教授を会長として沖縄で開催されました。さらに第3回は私が会長を務め、姫路市において開催させていただきました。いずれの学術集会も盛会裏に終了し、会員数も着実に増加しております。今後は、第4回学術集会が石島旨章教授を会長としてTAKANAWA GATEWAY Convention Centerにて、第5回は斎藤充教授を会長としてパシフィコ横浜ノースにて開催される予定です。国内施設を対象としたJKS Fellowshipも開始され、さらに韓国、ドイツ、オーストラリアのKnee Society、欧州The MeniscusとのExchange Fellowshipも動き出し、本学会の国際化は着実に進展しています。本年も関節鏡技術認定を目的としたJKS Cadaver Seminarを開催予定であり、多くの先生方のご参加をお待ちしております。Official JournalであるJournal of Joint Surgery and Research (JJSR) は、Impact Factorを有する国際的な査読誌となることを目標に鋭意取り組んでおります。会員の皆様からの積極的なご投稿をお願い申し上げます。

現在、日本膝関節学会の会員数は約3,750名に達し、整形外科領域においても有数の大きな組織へと成長いたしました。今後もこれまで培われてきた歴史と伝統を大切に継承しつつ、未来に向けて本学会のさらなる発展に尽力してまいります。引き続き、会員の皆様のご理解とご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

# 第3回日本膝関節学会

## 第3回日本膝関節学会・ The Meniscus Asian Summit 2025を開催して

事務局長／神戸大学大学院医学系研究科 整形外科 星野 祐一



2025年12月5日から6日の2日間にわたり、兵庫県姫路市のアクリエひめじにおいて、第3回日本膝関節学会をThe Meniscus Asian Summit 2025と同時開催いたしました。本学会は膝関節領域における国内外の最新の知見と技術が一堂に会する国際学術集会となりました。

第3回日本膝関節学会には2,100名を超える参加者が集い、活発な学術交流が行われました。併催された半月板の臨床・基礎研究に特化したThe Meniscus Asian Summit 2025には247名が登録し、高度に専門的な議論が交わされました。

本学会の大きな特徴は、世界的に著名な海外専門家を多

数招聘した国際的な学術交流にあります。Volker Musahl先生(アメリカ)には膝前十字靭帯損傷・治療の最前線についてご講演・ご議論をいただいたほか、Sven Scheffler先生(ドイツ)には両学会にわたり多大なご貢献をいただきました。また、Kristian Samuelsson先生(スウェーデン)による最新の運動解析とAI統合の発表、Sébastien Lustig先生(フランス)によるロボット支援TKAのアライメント戦略など、最先端の知見が共有されました。さらに、ドイツ膝関節学会(DKG)や韓国膝関節学会(KKS)からの招聘を通じ、国際的なパートナーシップをより深めることができました。

若手医師の教育や多職種連携も重視し、若手からベテラン、メディカルスタッフまでが膝関節外科の未来について熱く議論を交わしたことは、本学会の大きな成果です。夜には全参加者を招待して全員懇親会を開催し、国内外の参加者が一堂に会して無二の国際交流を楽しむ姿が印象的でした。

最後になりましたが、本学会の開催にあたり多大なるご支援を賜りました会員の皆様、ならびに関係各位に厚く御礼申し上げます。本学会で得られた国際的なネットワークと知見が、今後のわが国の膝関節外科のさらなる発展に寄与することを確信しております。



写真1：第3回日本膝関節学会 学会長による開催のあいさつ



写真2：第3回日本膝関節学会 全員懇親会で学会長の黒田教授および国際講演者の全体写真 左からSébastien Lustig先生(フランス)、Christoph Becher先生(ドイツ)、松田秀一先生(京都大学)、J.D. Yoo先生(韓国)、Sven Scheffler先生(ドイツ)、Kristian Samuelsson先生(スウェーデン)、黒田教授、Volker Musahl先生(アメリカ)、Gian Lucidi先生(イタリア)、Rene Verdonk先生(ベルギー)、Arno Schmeling先生(ドイツ)、石島旨章先生(順天堂大学)



写真3：学会期間中朝のランニングにて、朝日の昇る姫路城をバックに、後列中央に黒田学会長とVolker Musahl先生。

## 膝関節フォーラム

神戸大学大学院医学系研究科 整形外科

長井 寛斗



今回の膝関節フォーラムは武富修治先生(東京大学)が会長を務められ、学会初日12月5日(金)午後第1会場で開催されました。テーマは『ACL再建術はなぜfailureするのか?~ACL再建術を成功させるために必要な知識を再確認する~』で、ランチョンセミナーでは前達雄先生から『解剖学的ACL再建術の理論と実際』についてご講演いただきました。その後のシンポジウムでは、骨孔位置の影響・ACL以外の構造体による成績不良因子・矢状面評価から考える成績

不良因子とその対策の3セッションに分け、合計13名の演者が発表を行い活発な議論が交わされ、最後にはrevision/failureした症例提示によるディスカッションも行われました。筆者も演者の一人として登壇いたしましたが、会場は多くの聴講者で埋まり大変盛況で、初回ACL再建術に必要な知識と手術のコンセプトを系統立てて整理できる有意義なフォーラムとなりました。

膝関節フォーラム会長  
武富修治先生

熱いディスカッションの一場面(古賀英之先生)



症例提示による討論

## The Meniscus Asian Summit 2025

神戸大学大学院医学系研究科 整形外科

西田 京平



2025年12月6日午後から7日にかけての2日間にわたり、The Meniscus Asian Summitが開催されました。本会は、2010年以降ヨーロッパで継続的に開催されている「The Meniscus」のアジア版として企画されたものであり、2023年のソウル開催に続く第2回目の開催となります。

本サミットには、アジアから日本・韓国をはじめ、タイ、マレーシア、シンガポール、さらにオーストラリア、スペイン、ベルギー、フランス、ドイツ、ルクセンブルクから多数のエキスパートが招聘され、半月板に関する基礎研究、各地域における手術トレンド、アジアに特徴的な円板状半月板、ならびにbiological augmentationなど、多岐にわたるト

ピックについて活発な議論が交わされました。また、「The Meniscus」創設者である René Verdonk 先生および Philippe Beaufils 先生からは、変性半月板治療における国際的コンセンサスと今後の課題についてご講演いただき、非常に示唆に富む内容でした。

参加者は200名を超え、会場は終始活気にあふれた雰囲気になりました。本サミットは、半月板治療の最新動向を体系的に整理するとともに、今後の臨床および研究の方向性を考える上で、極めて有意義な機会となりました。



半月板ポーズでの集合写真



Philippe Beaufils先生(左)とRené Verdonk先生(右)

# 2025年度論文賞 受賞者

## JKS 誌 優秀論文賞

JCHO 群馬中央病院 整形外科 野仲聡志



### 「内側半月板後根損傷保存的加療の最長7年にわたる長期経過による、経時的な臨床成績と画像上の変化の検討」

この度、日本膝関節学会 2025年度優秀論文賞を拝受させていただきました。JCHO 群馬中央病院の野仲聡志と申します。日本膝関節学会理事長であられる黒田先生が会長を務められた学会で、このような栄誉ある賞を頂けたことを非常に光栄に存じております。本論文の内容は、内側半月板後根損傷に対する保存的加療の、短期から中期における縦断的な経過を報告したものです。ご一読いただければ幸いです。微力ながらこれからも、臨床で遭遇する疑問に対し研究を続け、対外に発信して参りたいと思います。

## JKS 誌 優秀論文賞

札幌医科大学医学部 整形外科学講座 堀田 和志



### 「傾向スコアマッチングを用いたHTO+centralization法併用群とHTO単独群の臨床成績の比較」

この度は第3回日本膝関節学会において、このような大変名誉ある賞を頂き誠にありがとうございます。この場を借りて、ご指導頂いた寺本篤史先生、池田康利先生をはじめ、札幌医科大学整形外科同門の先生方に改めて感謝申し上げます。また、ご選考いただきました先生方にも深く御礼申し上げます。

本論文は、従来のFujisawa pointを指標としたHTO群と、Centralization法を併用し目標アライメントをややundercorrectionとした群を、傾向スコアマッチングで患者背景を揃えて比較しました。短期成績では同等であり長期成績が期待されます。

本受賞を励みにさらなる臨床および研究に励んでまいります。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

## JJSR Best Paper Award

慶應義塾大学医学部 整形外科学教室 秋葉 絢子



### 「Development of a wearable system to estimate knee adduction moment of patients with knee osteoarthritis during gait using a single inertial measurement unit」

この度はJJSR Best Paper Awardにご選出いただき、誠にありがとうございます。本研究では、変形性膝関節症(KOA)患者の歩行時膝内反モーメント(KAM)を、膝に装着した単一IMUから推定するウェアラブルシステムを開発し、推定精度と再現性を報告いたしました。KAMを簡便に計測できることで、外来での患者評価や介入効果判定に加え、日常生活下での評価への展開も期待されます。受賞を励みに、生活に根ざしたデジタルバイオマーカー確立を目指し研究を進めて参ります。計測にご協力くださった三田病院の皆様、慶應義塾大学整形外科学教室の皆様、ならびに日頃よりご指導を賜りました名倉武雄先生に深謝申し上げます。

## 学会誌のご案内

### 日本膝関節学会誌 (JKS 誌)



JKSでは年3回和文雑誌を発行しており、メディカルオンラインでご覧いただけます。1、2号には発表論文、3号には原著論文を掲載しています。

※メディカルオンラインの購読者IDとPWは、JKSホームページのマイページ内お知らせに掲載しています。

▶アクセスはこちらから



### Journal of Joint Surgery and Research (JJSR)



JJSRは日本膝関節学会、日本股関節学会、日本人工関節学会の公式英文学術雑誌です。

股関節、膝関節、足関節、肩関節、肘関節等の関節分野における臨床研究・基礎研究に関する質の高い研究論文を発表する英文のオープンアクセスジャーナルです。

▶アクセスはこちらから



# 第3回日本膝関節学会 表彰者

## JKS 誌 最優秀演題賞

JCHO 群馬中央病院 整形外科 野仲 聡志



### 「Thaunat分類から見たramp lesionの特徴～type1-5の5郡での比較検討～」

この度、第3回日本膝関節学会最優秀演題賞を拝受させていただきました。JCHO群馬中央病院の野仲聡志と申します。同会の優秀論文賞に続き、このような栄誉ある賞を頂け、盆と正月が一緒にきたように感じておりますが、当院から発信したことがご評価を頂けたことを非常に嬉しく思っております。本演題は膝前十字靭帯損傷に合併する内側半月板ramp lesionの分類ごとの特徴を調査したもので、関節部断裂の完全断裂を含む1型と5型は、膝屈曲時に断裂部断端が後方へ転位する(後方に不安定である)ことを報告させていただきました。今後もramp lesionに対する研究を続け、皆様の診療の一助となれるよう尽力して参ります。

## Best Paper Award

善衆会病院 整形外科 大前 洋明



### 「Incidence of the Second Fractures in ACL Injury Is Associated with Anatomical External Tibial Rotation, High Frequency of Lateral Meniscus Oblique Radial Tears, and Residual Rotational Instability」

この度、第3回日本膝関節学会Best Paper Awardに選出いただき誠に有難うございました。本研究は善衆会病院の臨床研究で、Second骨折を有するACL損傷膝は脛骨の外旋位、LMORTの合併が多いという特徴、そして術後の回旋不安定性の残存が多いという結果が得られました。Second骨折の有無がLEAP追加等の術式選択の判断材料の1つとなり得る重要な結果が得られたと考えております。このような名誉ある賞を頂くことができ、大変光栄に存じます。黒田先生をはじめJKS理事・評議員の先生方、御指導いただいた木村雅史先生をはじめ善衆会病院の先生方にこの場をお借りして感謝申し上げます。

## Best Poster Award

神戸大学大学院 整形外科 元野 紘平



### 「TKA周術期出血の予測因子の機械学習解析」

この度はBest Poster Awardという栄誉ある賞を賜り、大変光栄に存じます。本研究では、TKA周術期出血のリスクファクターをAIによる機械学習を用いて解析致しました。研究をご指導頂きました黒田良祐教授、松本知之先生、中野直樹先生、AIの機械学習に関してご指導頂きました乾淳幸先生をはじめ、神戸大学整形外科の同門の先生方に心より感謝申し上げます。今回の受賞を励みに、臨床に還元できる様に研究に取り組んで参りますので、引き続きのご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

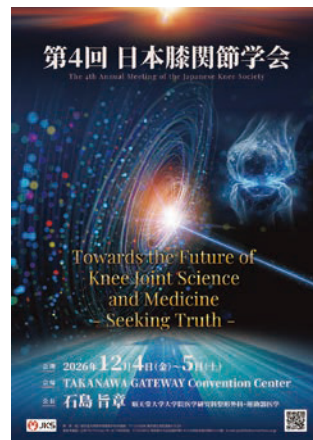
## 会 告

### 第4回 日本膝関節学会

会期：2026年12月4日(金)～5日(土)  
会場：TAKANAWA GATEWAY Convention Center  
(JR山手線 高輪ゲートウェイ駅直結)  
会長：石島 旨章  
(順天堂大学大学院医学研究科整形外科・運動器医学)

テーマ：  
『Towards the Future of Knee Joint Science and Medicine  
-Seeking Truth-』

一般演題募集期間：  
2026年4月21日(火)～6月2日(火)



▼ホームページはこちら



▼演題募集ページはこちら



### 第5回 日本膝関節学会

会期：2027年12月3日(金)～4日(土)  
会場：パシフィコ横浜ノース全館  
会長：斎藤 充(東京慈恵会医科大学 整形外科科学講座)

### 第6回 日本膝関節学会

会期：2028年12月7日(木)～8日(金)  
会場：京都国際会館  
会長：松田 秀一(京都大学 整形外科科学講座)

# 第1回 AKS-JKS Traveling Fellowship 報告

埼玉医科大学 整形外科 荒川 嵩大



Dr. Samuel MacDessi & fellowの先生達と

2025年10月に北海道大学の鈴木裕貴先生とともにオーストラリア研修の機会を頂きました。最初のPerthではホストのRoss Radic先生をはじめ色々な先生の膝関節鏡手術を見せて頂き、また私達のリクエストでGavin Clerk先生のMAKO TKAの見学にも行かせて頂きました。次のSydneyではDavid Parker先生、Samuel MacDessi先生、Myles Coolican先生、Justin Roe先生などの手術を見せて頂いたほか、骨切りを事前に3次元で計画してPSIガイドを作成していたのが印象的でした。その後Melbourneに移動し、Timothy Lording先生やJulian Feller先生などの手術を見せて頂いたのち、最後にHobartでAOA/AKS Annual Meetingに参加させて頂き、私自身も発表の機会を頂きました。今回の研修を通じて国際的な見識を得られたこと、また非常に多くのtop of the topsの先生方と交流でき多彩な手術を拝見できたことは、関係の密なAKS-JKS間のtraveling fellowshipでないと得られない、とても貴重な経験だったと思います。このような素晴らしい機会を与えて下さいましたJKS国際委員会の先生方、学会事務局の皆様、また現地で心温かく歓迎頂きましたAKSの先生方に心より深謝申し上げますとともに、この経験を今後の臨床や研究に活かし、少しでも日本の膝関節外科の発展に寄与出来ますよう精進をして参りたいと思います。



AOA/AKS Annual Meetingで発表の機会を頂きました



シドニーハーバーブリッジの「上」に登りました



Dr. David Parkerと

小樽市立病院 整形外科/北海道大学大学院医学研究院 整形外科学教室 鈴木 裕貴



2025 AKS Annual Scientific Meeting。左から、Godfather 中川匠先生、Traveling fellow 荒川嵩大先生、Dr. Myles Coolicanと。

第1回AKS-JKS Traveling Fellowshipの機会を賜り、2025年10月にPerth、Sydney、Melbourne、Hobartの4都市を訪問いたしました。Perth・Sydney・Melbourneでは、病院および研究施設の見学、手術見学を中心に研修を行い、特にロボティックTKAの普及や、ACL再建、半月板縫合、MPFL再建などスポーツ整形領域における洗練された手術手技を間近で学ぶことができました。HobartではAOA Knee DayおよびAKS Annual Meetingに参加し、各地で出会った先生方の研究発表を拝聴するとともに、私自身も発表の機会をいただき、意見交換を通じて学術的な刺激と国際的なつながりを得ることができました。本フェローシップを通じて、医療と研究への情熱に加え、互いの文化を理解しながら築かれる人とのつながりの豊かさを深く感じることができました。今回の経験を今後の診療や研究に生かし、微力ながらJKSならびに日本の整形外科の発展に貢献できるよう努めてまいります。この貴重な機会を与えてくださいましたJKS関係者の皆様、現地で温かく迎えてくださったAKSの先生方に心より御礼申し上げます。



2025 AOA Annual Scientific Meetingにて。



Dr. Justin Roeの手術見学。Fellowの先生達と。



Dr. Julian Fellerの手術見学。

# 2025年度 JKS-Meniscus Traveling Fellowship 報告

大阪大学大学院 医学系研究科 運動器スポーツバイオメカニクス学共同研究講座  
辻井 聡



JKS-Meniscus Traveling Fellowship in Asia (2025年12月1~13日)に参加し、韓国および日本で2週間の研修を行いました。本Fellowshipは1月の欧州研修と合わせて計4週間、同じフェローと継続的に学ぶことができる点が大きな特色であり、国際的な連携を深める極めて有意義な機会となりました。

韓国では、Allograftを用いた半月板移植症例の豊富さが特に印象的で、同じアジア圏における日本との差を実感するとともに、円板状外側半月板に対する手術の洗練度に深い感銘を受けました。

日本では、姫路にてJKSおよびMeniscus Asian Summitに参加し、発表および討論の機会を頂きました。各国の専門家による議論を通じて、半月板治療におけるConsensus形成の重要性を強く認識しました。広島大学では超音波を用いた半月板逸脱評価など独自の研究手法を見学し、東京科学大学ではCentralizationをはじめとする高度な手術手技と豊富な症例数に触れ、多くの刺激を受けました。また、日本人である私に対しても多大なるご厚情を賜り、誠に恐縮しております。

今回築いた国際的ネットワークを今後の半月板治療の発展に活かしていきたいと考えております。このような貴重な機会を与えてくださった国際委員の先生方、学会事務局の皆様、ならびにご支援頂いた阪大の先生方に改めて心より感謝申し上げます。



写真1 Ahn先生を囲んで@韓国



写真2 姫路城を案内して参りました！左から(敬称略) Nicolas Pujol, Jerome(フェロー), Romain Seil, Rene Verdonk, Philippe Beaufils, Kyu(フェロー), 辻井

# 高度変形膝に対する ロボティックTKAの応用

日本医科大学 整形外科 大島 康史



## はじめに

人工膝関節全置換術 (total knee arthroplasty : TKA) におけるロボティックスの使用率は、日本では2023年時点で約10%であるが、オーストラリアではすでに2024年に42%であり、今後、ますます世界的に増加すると考えられる。そこで、ロボティックTKAの特徴と高度変形膝に対するわれわれの試み、課題と展望について概説する。

## ロボティックTKAの特徴とパラダイムシフト

2026年2月現在、日本国内では6機種が認可されており、術前画像検査の要否、骨切りがボーンソーかミリングパーカ、TKA以外にも適応があるかなどの違いがある。

われわれが使用しているStryker社「Makoシステム」は、TKA、人工膝関節単顆置換術や人工股関節全置換術にも使用可能である。特徴は、1. 術前CTに基づく3次元プランニング、2. 術中軟部組織バランスのリアルタイム計測、3. ボーンソーによる正確でスムーズな骨切り、4. コンピュータ制御とハプティック技術による安全な操作、の4点に集約される。

従来のTKAでは、まず骨切りを行い、その後に軟部組織バランスを調整するが、これは術者の経験と感覚による“art”の要素が含まれていた。これに対しロボティックTKAは、骨切り前に軟部組織バランスを評価し、モニター上で骨切り量と角度を調整し、骨切り後のアライメントと軟部組織バランスを決定してから骨切りを行う。この「予測可能性」こそがロボティックスの真髄であり、これまでのTKAの概念を変えたと言える。

## ロボティックTKAの利点

アライメントや軟部組織バランスを0.5°・0.5 mm単位で調整可能である。そこで、従来のmechanical alignmentと長方形ギャップや、近年注目されている、個々の下肢アライメントや関節面形状、軟部組織バランスを再現するpersonalized alignmentも、モニター上で骨切りラインを操作することで容易に行える。

また、追加骨切りにも有用である。従来は硬化した骨を数mmだけ追加で切る際、骨切りガイドの再設置が不正確になり

やすく、正確な追加骨切りは困難であった。しかしロボティックスを用いれば、初回骨切り後の残存した骨欠損やタイトなギャップに対し、モニター上で追加骨切り量を設定すれば、極めて正確に実行できる。

## 高度変形膝に対する利点と臨床応用

さらに、任意の骨切りラインが設定可能なことと骨切り精度の高さは、高度変形膝にも応用が可能で、有用性が高い。

まず「髓内ロッドの不要化」である。大腿骨の高度な弯曲変形例では、従来法の髓内ロッドが使用できない。これに対しロボティックスでは光学式トラッカーで位置を認識するため、通常症例と同様の手順で手術を遂行でき、コンピュータナビゲーションより正確性で勝る。

また金属補填材を要する骨欠損がある場合でも、軟部組織バランス調整後に骨欠損の範囲をコンピュータ上で評価し、補填材の厚みに合わせた正確な追加骨切りが容易に行える (Fig.1) (Oshima Y, Arthrop Today, 2025)。さらに、モニター上で追跡可能なプローブを応用すると、インプラントの設置位置や膝蓋骨のトラッキングが術中に確認でき、インプラント設置の正確性の向上や膝蓋前部痛の予防に大きく寄与する (Fig. 2)。

## 課題と展望

初期導入や消耗品費用、セットアップに伴う手術時間の延長、などが課題である。しかし、正確な手術は術後成績を向上し、早期回復や長期的な耐久性の向上に有効であり、結果としては医療経済的メリットが大きいとする報告も多い。また、再置換術への使用は認可されていないこと、各機種によって選択インプラントが制限されることも、今後の改善点である。

現在、ロボティックTKAによる術前、術中、術後のビッグデータの解析が進められている。個々の症例に対し最適な臨床成績を得るための下肢アライメント、軟部組織バランスなどの「解」が自動的に提示され、整形外科医が筋鉤を保持していれば、遠隔操作により自動ロボットが正確無比なTKAを完遂する時代の到来も、そう遠くないかもしれない。

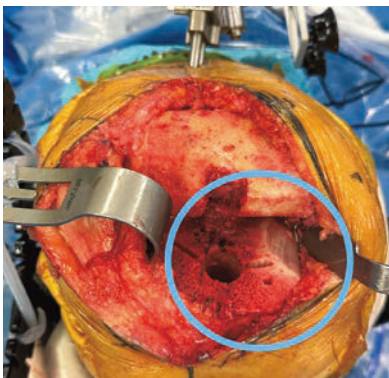
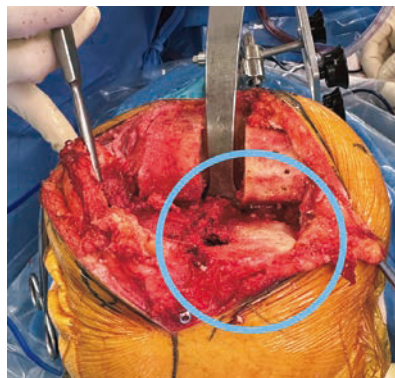


Fig. 1 (a)初回骨切り後の脛骨内側の骨欠損部



(b)ロボティックスによる5 mm追加骨切り

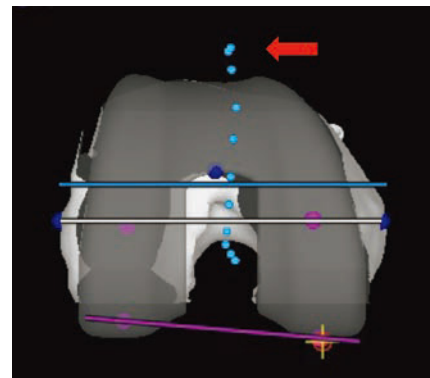


Fig. 2 プローブによる膝蓋骨トラッキングの確認

# 疼痛管理用高周波システム講習プログラムのJKSでの運用開始について

教育研修委員会 担当理事 / 帝京大学医学部 整形外科科学講座 中川 匠



疼痛管理用高周波システムは、神経や疼痛発生源に高周波エネルギーを与えることで痛みの伝達を調整・遮断するインターベンショナル治療デバイスです。これまで、冷却機能を有するCooliefが変形性膝関節症に対する疼痛コントロールに使用されてきましたが、2025年には最新世代のRF デバイスであるAccurianが新たに保険収載され、膝OAに限らず幅広い疼痛管理に使用できるようになりました。

これらの疼痛管理用高周波システムの使用にあたっては、保険収載通知において「変形性膝関節症に関する専門の知識および6年以上の経験を有し、関連学会が定める所定の研修を修了している常勤の医師が、関連学会の定める適正使用指針を遵守して実施した場合に限り算定する」と規定されています。従来、Cooliefの認定プログラムは日本関節病学会により運用されていましたが、膝OAは本学会が重点的に取り組む疾患であり、外科的治療を含めた包括的な視点で治療を検討する本学会 (JKS) において

も、認定プログラムを新たに立ち上げることとなりました。

本システムによる治療は、痛みの原因となる神経を熱エネルギーで変性させることで、長期間にわたる疼痛緩和が得られるという利点があります。一方で、神経破壊に伴う膝OAの進行などの合併症が発生する可能性があり、その後のリハビリが可能な施設、あるいは連携体制の整った施設で実施する必要があります。

今後、認定講習プログラムの開催については、学会ホームページ等を通じて周知してまいります。本治療の実施を予定されている先生方におかれましては、ぜひ本制度をご活用いただけますようお願い申し上げます。なお、JKS 会員で既にCooliefの講習会を受講された先生につきましては、JKS 認定講習会を免除いたしますので、学会事務局までお問い合わせください。

## 事務局からのお知らせ

### マイページのご案内

JKS ホームページ内の「マイページ」では、ご登録情報の閲覧・変更が可能です。ご勤務先やご自宅住所等の変更がございましたら、マイページより更新をお願いいたします。ログインID・パスワードを失念された場合は、マイページ内の「ID・パスワードを忘れた方はこちら」からお問い合わせください。

▼マイページ



## 編集後記

日本膝関節学会の設立からまもなく3年を迎えますが、このJKS ニュースレターも第5号の発刊となりました。

本号の巻頭では、黒田良祐理事長から、日本における膝関節外科とこれまでの日本膝関節学会の活動について説明頂き、会員数の増加と学会の国際化への着実な歩みが示されました。続いて、昨年12月に黒田学会長地元の姫路で開催された第3回日本膝関節学会および同時開催のThe Meniscus Asian Summit 2025と膝関節フォーラムについて、それぞれ星野祐一先生、西田京平先生、長井寛斗先生から報告して頂きました。膝関節治療についての最新の情報の全てに接することのできる学術集会ですが、今年は第4回が石島旨章会長によって新しいTAKANAWA GATEWAYで開催される予定です。さらにJKS各賞の受賞者の紹介とコメント、学会誌の案内、今後の学術集会の予定についての告知があり、荒川高大先生と鈴木裕貴先生からはAKS-JKS Traveling Fellowshipでのオーストラリア研修について、辻井聡先生からはJKS-Meniscus Traveling Fellowshipについて学会の国際交流の報告を頂きました。

Something Newの話題として、大島康史先生から増えつつあるロボティックTKAによる予測可能性というパラダイムシフトについての解説があります。また、教育研修委員会担当理事の中川匠教授からは、疼痛管理用高周波システムの認定講習プログラム運用開始の告知がありました。治療導入を予定されている先生方は、是非ご利用下さい。

今年も、冬季オリンピック、WBC、サッカーワールドカップと世界的なスポーツイベントが連続します。一方で非常に不安定な国際情勢でもあり、医療を取り巻く環境はより厳しい状況ではありますが、今後も本ニュースレターが会員の皆様にもお役に立てる情報をお送りできるように努めてまいります。



荻内 隆司  
日産厚生会玉川病院

JKS ニュースレター No.5 2026年4月30日発行  
編集：日本膝関節学会 広報・ニュースレター委員会  
中村憲正(担当理事)、中山寛(委員長)  
赤木龍一郎、荻内隆司、落合聡司、熊橋伸之、佐藤卓、  
前達雄、松下雄彦

発行：一般社団法人 日本膝関節学会  
〒103-0027 東京都中央区日本橋3-10-5 オンワードパークビルディング  
株式会社コングレ内  
TEL 03-3510-3746 FAX 03-3510-3748 E-mail info@knees.or.jp  
URL <https://www.knees.or.jp/>